
ナルマと虚構と超能力

ラキベル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナルマと虚構と超能力

【Nコード】

N0026Q

【作者名】

ラキベル

【あらすじ】

ニートだった丸山高進^{まるやま こうしん}はバイトの面接の帰り道に火を虚構する犬に襲われる。その時、片瀬優香と出会い、ナルマという組織に入る事になる。そしてナルマの仲間達と共に虚構する者と戦うことになる。

一話 火を虚構する犬

ここは両脇にたくさんの家が並んでいる道。簡単に言うと住宅街だ。どこにでもあるような住宅街だが、一つだけおかしな点がある。

まだ夕方の五時だというのに人の声はおろか、動物の声すら聞こえない。

二つの声以外は。

巨大な犬の様な生き物が男を追いかけている。

「どうすだろう。おいしいすだろう。もうあきらめるすだろう」

巨大な犬の様な生き物はよだれをたらし、舌を出しながら甲高い声で男に言う。

「くそ。なんなんだよこいつ」

男は誰に言うでもなく叫ぶ。

一体この生き物は何なのか。この男は何者なのかは少し過去にさかのぼる必要がある。

男の名前は丸山高進^{まるやま こうしん}。

高進は世に言うニート。働くことはせず、勤勉にも勤まらない。

一日中ネットをしたり、ゲームをしたり、漫画を読んだりして生きていた。

だが、痺れを切らした親が激怒したので、昨日ばさばさで肩まで伸びていた髪をスポーツ刈りにし、服がパジャマと高校の時に着ていた制服しかなかったので仕方なくスーツと革靴を買い、用意万端にして今日バイトの面接に向かった。

結果をいうと、面接は散々だった。

緊張で声は出なかった。

面接官の顔を見るなんて出来るはずもなかった。
わかっていた。最初からわかっていた。

高進は自分なんか世間に認めてもらうことが不可能な事くらい。
世間を捨てた人間が世間に認めてもらうなんて事が不可能な事くらいわかっていた。

髪だつて床屋に行つて切つたわけではない。床屋で働いている親に頭を下げて切つてもらつた。

スーツと靴だつて自分で買ったのではなく、親に買ってきてもらっただけ。

全て親頼みだつた。

高進の力でやつたのは面接くらい。

その面接は散々だつた。

生きているのがもう嫌だつた。

死んでもいいとその時は思っていた。

自分の駄目さに落ち込みながら住宅街を通り帰宅していた。
そんな時、曲がり角を曲がると一匹の犬がいるのが見えた。

その犬は何かを食べている。

高進はその犬を見て鳥肌が立ち、冷や汗が出た。

その犬は中型犬ほどの身長だが犬歯は地面につくほど長く、血のよ
うに赤黒い毛色をしている。

いや、血のようなではない。血だ。

先ほどから食べていたのは死体。

その死体の肉を前歯を使つて裂き、食べていたのだ。

その死体は一つの大きな穴腹にが開いていて、焼けていた。
まるで歯で穴を開けられたように。火に焼かれたように。

犬はその死体を食べるのをやめて高進の方を見てきた。

「何見てるすだろう。俺見てるすだろう。お前も食べてやるすだろ
う」

そういうと同時に骨の軋む音が犬から聞こえた。

その音と同位する様に犬はどんどん大きくなっていく。

中型犬位の大きさだったその犬は大型犬ほどの大きさに、更には高進の大きさをさえも抜いた。それでもまだ止まらない。

最終的に犬の大きさは高進の倍ほどになった。

先ほど死んでもいいと思っていたのに。生きることが嫌だったのに。高進は後ろを向いて全力で逃げた。

死なないために。生きるために。

その後を犬も追いかける。よだれをたらし、舌を出しながら。

30メートルほど全力で走って高進はもう体力が尽きた。でも走る。

生きることをあきらめられないから。

「どうすだろう。おいしいすだろう。もうあきらめるすだろう」

犬はよだれをたらし、舌を出しながら高進の後を追いかける。

最初こそ10メートルほどの差はあったが、もう高進と犬の差は1メートルもない。

「くそ。なんなんだよこいつ」

高進はほとんど無い体力を使って誰に言うでもなく叫ぶ。

いや、皆に言っていると言った方が正しいのかもしれない。

周りは家。まだ時間も午後5時だ。いつもなら人が歩いている。だが、誰も歩いていない。

家には誰がいるはず。でも誰も気づかない。

男の叫びは結局誰にも届かなかった。

「あ、ちょ、やばい……フグ」

高進は足がもつれて大胆に転んだ。

後ろを振り返ると上から液体が落ちてきた。

高進の真上には犬の顔がある。落ちてきたのはどうやらよだれのようだ。

「あきらめすだろう。おいしく食べてやるすだろう」

そういつて犬は口を大きく開ける。

その大きさは高進を丸かじりするには十分な大きさだ。

「死にたくない。お願いだ。俺を食わないでくれ。他ならなんでもする。俺を、俺を見逃してくれ」

高進は大きな声で言うつもりだったが、体力が限界を超えてしまっている。声はほとんどでない。

だが、犬なのでその声を聞こえた。

「それは無理すだろう。でも、死に方くらい選ばせてやるすだろう。噛まれて死ぬか、焼かれて死ぬか選ぶすだろう」

噛むのは歯でかむことだろうが、焼くというのはどういことなのか高進は気になった。

「ど、どうやって焼くんだ。お前はマッチでも持っているのか？」

高進は聞いた方が早いと思い、犬に聞く。

「仕方ないすだろう。冥土の土産に見せてやるすだろう」

そういうと犬は少し後ろに下がり上を向く。

そして口を大きく開けた。

その口の前が丸く赤く光っている。

火だ。火の玉が犬の口の前に現われた。

「ハッ」

犬がそんな声を出すと火の玉は空へ飛んでいった。

そして高進の方を向いて言う。

「すごいすだろう。これが俺の虚構すだろう。……ん」

犬は高進の見ていたが

「新しい餌がきたすだろう」

そう言つて、高進の後ろを見る。

「それがお前の虚構ね。そんな程度の虚構なら私一人でもどうにかなりそうね」

落ち着いた雰囲気の中の女の声が高進の後ろの方から聞こえる。

高進は声の主の方を見ると、ジャージ姿の中学生もしくは高校生と思われる女の子が立っていた。

髪は茶色く、腰の辺りまで伸びていて、耳には鳥の形をしたピアスをつけている。

その女の子は高進の方を見て

「あんたはそこを離れた方がいいよ。こいつは今のあんたじゃ敵いっこないから」

そういわれて高進は頷いて震える足でどうにか立ち上がり、女の子の後ろの方へ走っていき、女の子の後ろに隠れる。

高進は自分をみつともないと思った。

女の子にかばってもらう二十歳の自分。

でも、少しでも自分が生き残るためにはこうするしかない。

「あんたもこの戦いをちゃんと見てなさい。明日からはあんたも戦うんだし」

女の子は犬を見ながら高進に伝えた。

「えっ」

高進には明日からあんたも戦うという意味がわからなかった。

大分疲れが取れたためはつきりした声で

「明日から戦うってどういうことだ」

と聞くと、女の子は犬の方を見ながら

「この戦いが終わったら教えるよ。だから、それまでそこから動かないで」

と言う。

女の子は、はいている青色のジャージのポケットに手を入れて普通の鉄の塊を出した。

縦、横、高さともに8センチほどの四角い鉄。

その鉄が女の子の手の中で動いたと思うと、徐々に一メートルほどの鉄の剣になった。

持つところは丸く、先に行くほど鋭く尖っている。

お世辞にもかっこいいとは言えない剣だ。

その剣を片手で持っている。

鉄で出来た剣を犬の方に向けて強気な声で

「三回回ってワンと吠えたら見逃してあげるよ」

女の子は自分より遙かにでかい犬に臆する事もなく挑発する。

「ばかにすなすだろう！。許さないすだろう！！」

犬は簡単にその挑発に乗った。

「ハッハッハッ」

犬は三つの火の玉を作り出し、女の子に飛ばした。

女の子はそれに剣を向ける。

「おまえばかりすだろう。そんな剣を向けたところでどうにもならないすだろう」

確かに火を斬ったところで二つになって襲ってくるだけだ。

高進は思わず女の子を守るために思わず前に行こうとする。

だが、女の子は自分の前にいこうとする高進に自信満々に

「大丈夫。私に任せてよ」

と言うと女の子の手に握られている剣はどんどん小さく、丸くなつてなつて女の子の手に元の四角の形に戻る。

そしてすぐにまた動き始めて次は鉄の壁になった。

いや、壁と言うよりは盾と言ったほうが正しい。

壁には取っ手が付いていてそれを女の子が握っている。

その盾の向こうで三つの壁を叩くような音が聞こえる。

それは火の玉が当たった音だ。

どうやら飛んでくる火の玉を防御したようだ。

そしてすぐにまた壁は小さく、丸くなり女の子の手で四角くなる。

その鉄を女の子は手に持ったまま犬に向かって走っていく。

爪で攻撃をしてくる犬の攻撃を避けて、犬の腹の下で止まる。

鉄を剣の形に変わり、そのまま伸びた。

伸びた剣は犬の腹に突き刺さり、血が女の子にかかる。

だが、女の子はその血と泣きながら暴れる犬から剣が抜けないように強く剣を持っている。

腹の中にある剣の先を二つに分けて両方針のように尖がらせ、片方は尻尾に、片方は頭に向かって伸ばすと、両方とも肉を突き破って

外に出た。

更に犬は暴れるがどうか女は手に力を入れて鉄を放さないようにする。

そしてその伸ばした針の先の下の方を鋭くした。

そして思いっきり下に引く。

ズバツ。

と音が聞こえると同時に血の滝が流れた。

腹の下が斬れたのだ。

それも一部ではな全体が。

「キャンキャンキャンギャンギャン」

ものすごい大きな泣き声をあげて犬は力なく倒れる。

倒れた犬はピクピクと痙攣している。

「まさか……こんな……俺が……負けた……す……だろ……う……」

犬はそれを言つて動かなくなった。

そしてその瞬間、高進は目を疑った。

消えたのだ。

犬の死体と血が跡形もなく。

まるで何も無かったように。

そして、犬が消えて少しすると周りの住宅から人の声や、カラスの鳴き声などがいきなり聞こえるようになった。

女の子は驚きで口を開けてポカーンと開けている高進に近づき

「ふう。これでどうにか助かったね。怪我無かった？」

と聞くと高進は我に返り女の子の肩を持つて

「あの化け物は何なんだ！何で鉄の形が勝手に変わるだ！あの化け物は何で消えたんだ！何で今まで聞こえなかった人の声がいきなり聞こえるようになったんだ！虚構って何だ！お前は一体何者なんだ

！！」

女の子を前後ろに揺らしながら質問攻めをする。

「ちょ、ちよつと待て。目が回る」

女の子はあまりに高進が揺らすので目が回ってしまった。

そんなこともお構いなしに高進は質問しながらもつと、前後ろに女の子を揺らす。

「世界がゆがむ」。教えるからもう揺らさないで」

鉄の形を変える謎の女の子との出会い。

高進はこれから自分の人生が大きく変わる事とは、この時は少しも想像してなかった……。

一話 火を虚構する犬（後書き）

感想やアドバイスをくれるとうれしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0026q/>

ナルマと虚構と超能力

2011年1月11日21時01分発行